

『使者たち』——ストレザーの奔放さが意味するもの

後川 知美

序

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) の『使者たち』 (*The Ambassadors*, 1903) の結末で、主人公ストレザー (Lambert Strether) は、「正しくあるために」(346)、彼にとって有益だと思われた女性たちとの関係を断ち、得られたはずの経済的豊かさや社会的安定を放棄する。このようなストレザーの自己犠牲や自制的振る舞いに注目する先行研究では、ストレザーを禁欲的な男だとみなす傾向が強い。たとえば批評家シアーズ (Sallie Sears) は、「義務感が常にストレザーの生活の指針となっている」(116) と述べ、批評家クルック (Dorothea Krook) は「人生を楽しめない男」(8) ととらえる。また、批評家ブラッドベリー (Nicola Bradbury) は、「最後の場面では、悲劇的とさえいえる彼の道徳的偉大さについていける者がいなくなり、一人で前に進むしかなくなっている」(70) とし、ストレザーが正しくあろうとするこだわりの強さと、並外れた崇高さや厳格さを指摘している。

確かにストレザーには、禁欲的に生きることを人生の指針とする傾向があるだろう。しかしジェイムズは、ストレザーの禁欲主義を描きながらも、それを指針とした生き方が道徳的に優れているといった教訓を伝えようとしているわけではない。ジェイムズはむしろ、道徳的に優れた振る舞いをいかに小説で表現するかに関心の注意を払ってきたのである。批評家イーグルトン (Terry Eagleton) は、文学作品における道徳の扱われ方を、おおよそ、「定式化された規範や明確な価値体系としてではなく、人間の経験の中にある微妙なニュアンスに富んだ些細なものを感覚的に把握しようとする姿勢」(24) に見出しているが、そのような姿勢が『使者たち』においても顕著に見られる。

ジェイムズは、ストレザーの禁欲主義を描きながら、それだけでは表現しきれない彼の性格の複雑な動きを、彼が抱える「二重意識」(18) という繊細な心の状態としてとらえ、生への執着という主題を掘り下げている。批評家ホランド (Laurence B. Holland) は、ストレザーの持つこの二重意識のうち、「熱意」(18) と「冷めた気持ち」(18) に注目し、それぞれが、「過去の再現と新しい経験への期待」(233) であるとするが、そのような解釈は、ストレザーの禁欲主義的な側面だけでなく、自由を求める彼の態度にも着目して初めて可能になる。ストレザーの二重意識を考慮すれば、彼の禁欲主義的な側面を強調するだけでは不十分であ

ろう。実際、本作品の主題が「力の限り生きよ。そうしないのは間違いだ」(132)というストレーザの訴えにあるように、彼に禁欲主義とは別の意識が働いていることは明らかである。

そこで本論では、ジェームズの晩年の道徳観をより詳細に検討するため、禁欲主義を人生の指針とする男として読まれてきたストレーザの生へ執着する態度に、奔放さへの欲求が見て取れる点に着目する。そして、ストレーザの奔放さに、当時のアメリカの状況がどう関係しているのか、ジェームズが禁欲主義とのせめぎあいを助長するために導入した作品上の仕掛けがどう機能しているのか、あるいはこの作品に導入されている絵画を思わせる背景がどのような効果を持つのかを検証し、ストレーザの奔放さによってジェームズが新たにもたらした文学世界を解明してゆきたいと思う。

第一章 ストレーザの奔放さに見られる時代の影響

ストレーザは、彼の郷里マサチューセッツ州ウレット (Woollett) の有能な未亡人ニューサム夫人 (Abel Newsome) から、パリに遊学中の放蕩息子チャド (Chadwick Newsome) を連れ戻し、家業に従事させるよう依頼されている。ストレーザの任務が成功すれば、ニューサム一族の事業はさらに発展し、彼にはその報酬としてニューサム夫人との結婚が約束されている。

ニューサム家の繁栄は、勤勉や禁欲といったピューリタニズムに由来する価値観への信望が実を結んだものとも言える。ストレーザの友人である辣腕弁護士のウェイマーシュ (Waymarsh) も同じような価値観に基づき成功を収めている。ウェイマーシュは勤勉を重ねた結果、社会的な地位と富を手に入れており、「昔の偉大なアメリカ人」(77) やネイティヴ・アメリカンの勇敢な酋長「シッティング・ブル (Sitting Bull)」(158) を思わせる重厚な人物である。しかしウェイマーシュは、過労と悪妻に忍耐を強いられる日々を送り、ヨーロッパの華やかな雰囲気には馴染むことができない。また、ストレーザのように自らを失敗者であると認めて、ヨーロッパの魅力に身を委ねることのできる柔軟性を持ち合わせているわけでもない。ジェームズは、ニューサム夫人やウェイマーシュといった堅物の人物たちの社会的な成功を描きながらも、一方でストレーザがパリに魅了される様子に、禁欲的な生活だけでは得られないような生の充実感を表現し、別の価値観があることを伝えているようだ。

ところで、ジェームズが『使者たち』を構想し執筆した19世紀終盤から20世紀にかけてのアメリカは、「1860年から1900年の間に、工業投資額は12倍に、工業生産額は4倍に増加し、アメリカはイギリスをぬいて世界一の工業国へと躍進していった」(横山 216) と言われるように、産業が目覚ましい発展を遂げた時代だっ

た。しかも、産業的發展を遂げたアメリカ社会では、それとほぼ同時進行で「大量消費社会にさきがけをなす変化」(横山 217)、すなわち大都市におけるデパートの開店、チェーン・ストアの全国的展開、そして「販売を促進するための広告業」(横山 217)が確立していったのだが、そうした消費生活が中産階級の人々の間に定着していった姿も、『使者たち』の中に窺うことができる。

そのような時代背景は、ヨーロッパに到着して間もないウエイマーシュが、ストレザーとの散歩中、突然宝飾店に立ち寄り買い物をする場面に重ねることができる。ストレザーはウエイマーシュの突発的な消費行動を「聖なる衝動」(41)だと称し、彼が、ヨーロッパに対する怒りや憎しみを、無駄な消費という形で発散したと解釈する。

しかしより興味深いのは、ウエイマーシュの怒りの解消が、反社会的な行動によってではなく、消費によってなされている点である。憎しみの対象であるヨーロッパにおいて突如消費に走るウエイマーシュの行為には、勤勉一筋で省みる余裕のなかった妻との関係からくる焦燥感を、何らかの形で解消したいという、人間として当然の願いが込められているのではないだろうか。言い換えるなら、「消費」に走る行為には、禁欲主義一辺倒からの脱却という方向性が窺え、それまでのウエイマーシュの生き方と異なる奔放さが現れている。そしてストレザーが、ウエイマーシュの「聖なる衝動」を、「何のためでもなくただ自由のため」(41)だとしてとらえる様子には、快感や快樂への肯定が垣間見える。

快樂を肯定する同様の姿勢は、芸術家グロリアーニ (Gloriani) の生き方に憧れるストレザーの眼差しにも窺える。グロリアーニの魅力は、ストレザーの馴染んできた禁欲主義的な生き方とはずいぶん質が異なり、彼の芸術的才能だけでなく、数多くの女性たちと浮名を流し、紆余曲折を乗り越えてきた経験から来るものである。グロリアーニへの尊敬と憧憬の眼差しは、彼の所有する趣ある庭園の魅力により高められているが、ジェイムズは、修道院の静謐な雰囲気グロリアーニ庭園に加えることで、世俗の世界と神聖さを両立させているかのようにも見える。

さらにジェイムズは、グロリアーニがチャドの美的感覚を褒めることで、チャドが携わっていく広告産業が将来有望であるかのような印象を与えている。チャドは実家の経済力を頼りにパリに遊学する結構な身分であり、なかなか家業を継ごうとしないが、彼には優れた美的感覚と、広告業への好奇心がある。チャドには、家業が信奉してきた勤勉とは異なる価値観があり、彼が広告産業へ着目するのは、新時代のビジネスチャンスを見据えているからである。従って、ウレットの人々には理解されがたいチャドの価値観は、禁欲主義的とは異なってはいても、より良い人生につながる可能性が示唆されている。

パリでの新たな環境のもと、ストレザーは、チャドやグロリアーニに見られる

ような快楽を追求する生き方が人生を充足させることを実感する。また、ウェイマーシュの衝動的な消費行動と、そこに自由への欲求を認めるストレーザにも、これまでの生き方を問い直す姿勢が認められる。ジェイムズは、禁欲主義的な生き方に依存し満足するような視野の狭さを捨て、むしろそれに反するような生き方に、新しい時代の変化を感じ取っていたのではないだろうか。それ故に、パリでの新しい経験を否定することなく、むしろ自身もその世界に身を投じようとする、あるいは投じずにいられなくなるストレーザの姿に、人間が潜在的に持っている快楽への欲求を映し出しているように見える。そして禁欲主義一辺倒への警鐘を鳴らし、そこから少し脱却することで見えてくるものを、ストレーザが快楽に惹かれてしまう奔放さという形で表そうとしたのではないだろうか。

第二章 ゴストリーの役割に見られるジェイムズの理想

ジェイムズが「序文」でゴストリー (Maria Gostrey) の役割を「操り糸、トリック」(12) だと説明しているように、彼の目的は、彼女を感情のある一人の人物というより、作品に貢献する人物として活用することにあったようである。確かに、ストレーザの経歴だけでなく、実際には作品中に登場しないものの圧倒的な存在感を持つニューサム夫人のイメージも、ゴストリーとストレーザとの会話がなければそれほど生き生きとは伝わらなかったであろう。また、『使者たち』とほぼ同時期に書かれた他の後期長編小説である『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902) や『金色の盃』(*The Golden Bowl*, 1904) においても、ゴストリーのような「仕掛け」を持つ人物が配置され、「操り糸、トリック」としてその役割に磨きがかけられている。とりわけジェイムズの1890年代以降から晩年にかけての作品では、芸術性や技巧を迫及する傾向が強まった。しかし、「仕掛け」の役割がそれ程考慮されていなかった前期作品では、登場人物の経歴や背景を読者に伝えるために、第三者からの手紙や作者による長い説明が介入し、物語の進行が滞ることがあった。そのため、ゴストリーのように、ヨーロッパの案内人という立場でストレーザと交友関係を持ち、彼の相談相手としてストレーザの経歴や思考を自然な形で読者に伝える役割は、大いに評価できる。

もっとも、ジェイムズ自身が「仕掛け」としての役割を強調しているため、批評家ベル (Millicent Bell) が、ゴストリーの機能性を認めながらも、「自分自身の生を生きていない」(329) とするなど、彼女の人物像が十分に迫及されていないと批判する見方もある。しかし、批評家ガルガーノ (James W. Gargano) が、ゴストリーを「ジェイムズ作品のもっとも魅力的な相談相手」(11) だとみなしているように、ジェイムズはゴストリーによってストレーザの経歴を自然な形で提示できる「相談相手」としての機能に加え、彼女が物語において生き生きと存

在している印象をもたらすような魅力を付加することも忘れてはいない。

たとえば、バラ色のシェードを囲むストレザーとゴストリーの晩餐といったロマンティックな場面で、彼女は胸元の大きく開いたドレスを着用し、赤いリボンに首を巻いている。着飾ったゴストリーには美や快楽の要素が顕著であり、華やかな世界に馴染みのないストレザーにとって衝撃的である。というのも、ストレザーがよく知るニューサム夫人は、黒い絹の上等なドレスを着るのを好み、肌の露出やきらびやかな装飾品はほとんどなく、快楽の要素とは程遠いからである。言い換えるなら、ストレザーがこれまで「立派な」(45)人物だと賞賛してきたニューサム夫人とは異なる魅力が、ゴストリーの華やかさにより伝えられているのである。そしてゴストリーが象徴する華やかな世界は、禁欲的な生き方を貫いてきたストレザーに心地よい打撃を与え、新しい価値観が展開されるヨーロッパへ彼を導いてゆく。

このようなゴストリーの役割もまた、ジェイムズが彼女に託した「仕掛け」の一つだとしても、その「仕掛け」を十分に機能させるためには、ゴストリーが魅力を備えた一人前の登場人物として描かれる必要がある。実際、使者の任務に行き詰まり、傷心するストレザーが助けを求めて出かけたゴストリーの住居が、「小さなオランダ風の食堂」(342)や「こじんまりした古い庭園」(342)を備え、彼を「やわらかく取り囲み、温かく覆う」(346) 雰囲気を持ち合わせていることから、彼女の存在が、ストレザーの心情に大きな影響を与えていることがわかる。

ところで、批評家パイファー (Siobhan Peiffer) は、ストレザーが経済的に自立していないために彼の自由が制限されていることに着目し、「女性たちに決定権を委ね、運命を女性たちに握られている」(97) と、彼が女性の存在に大きく左右されている点を指摘する。確かに、ストレザーはニューサム夫人の期待にこたえる必要を感じているだけでなく、ゴストリーに対しても、出会った瞬間から、「まるで彼女が女主人でストレザーを客として接待している感じ」(19-20)を抱くように、彼女に導かれてゆく。その結果、ストレザーはヨーロッパに到着して早々、初対面のゴストリーに連れられるがまま、ロンドンの街へ繰り出すことになる。面識のないゴストリーと二人きりで異国の街を散策する行為は、ストレザーにとって、「常識の面ばかりか道徳の面でも自分をはるかに限界を超えた」(23)と感じさせるほど、それまでの考え方から逸脱する大きな出来事である。しかし、ゴストリーに惹かれ、彼女の言いなりに行動することで、ストレザーが縛られてきた禁欲的な価値観とは異なる欲求が、彼の心に潜在していることも示唆される。

ゴストリーがストレザーをヨーロッパ世界へ誘導し、彼の潜在的な奔放さを開花させる一方で、二人の会話が、故郷ウレットにおける彼の禁欲主義的な生活を明らかにしてゆく。ストレザーとニューサム夫人との関係性は、情愛に流された

ものというよりは、社会通念や規律を重んじたものに見える。そのためゴストリーが導き入れようとするヨーロッパがいかに魅力的に見えようとも、ストレーザには禁欲主義を指針とするウレットの人間という看板を捨ててしまう勇氣はない。しかも、ゴストリーからの誘いに対し、度々マサチューセッツ州ウレットの出身であることに言及してためらうストレーザからは、ゴストリーの誘導に乗ってしまう自分への戒めが感じられる。このようにストレーザは、ニューサム夫人とゴストリーという、二人の女性に左右されているような態度を示し続けるのであるが、その優柔不断さは彼の「二重意識」をより鮮明にしている。

結局、魅力的な相談役であるゴストリーは、ニューサム夫人の人物像や、彼女とストレーザの関係を読者に提示するだけでなく、ストレーザの潜在的な奔放さを引き出し、彼が引き受けた任務とは反対の自由へと導き、禁欲的な生き方に固執しないよう導く役割を担っている。ゴストリーとの外出には、ウレットでは得られなかった様々な快樂の要素があり、ストレーザはそれによって生きる喜びを感じる。それでいて、ゴストリーの誘いに対して、「ウレットは楽しんでいいのかわからない」(25)という言い訳をする彼には、ためらいがちに快樂を求める「二重意識」が窺える。ストレーザがヨーロッパで開花させる奔放さは、ゴストリーの巧みな誘導によるものであって、ゴストリーという案内役を差し挟むことで、その行為が完全には自発的なものではないことを示唆しているのである。それ故ストレーザとゴストリーとの関係は、より充実した生を味わうには、禁欲的であるだけでは不十分であり、新たな時代が求める自由奔放な価値観が必要であることを認識しながらも、その新たな価値観に急速に、また盲目的に染まることの危うさを示すものになっている。

第三章 絵画世界の導入に窺えるジェイムズの禁欲主義回帰

ジェイムズは、彼の小説論「小説の技法」(“The Art of Fiction,” 1888)において、絵画と小説が「人生を再現する」(47)という意味において同等のものだとみなしている。また、数々の画家たちとその作品を批評した『画家の目』(*The Painter's Eye*, 1897)では、画家の使命が「特定の瞬間を生き生きと伝えること」(114)にあると述べ、絵画と小説の接点を芸術という大きな観点から捉えようとしている。『使者たち』においては、パリの朝日やそよ風、打ち水、芝生の少女たちが飛び交うチュイルリー庭園、明るい日の光を浴びるリュクサンブール公園のテラスや並木道、樹木やこぎれいな女たちといった風景描写が、印象派の絵画を思わせるような色彩と光に満ちており、小説舞台を豊かにしている。さらにこうした絵画を思わせる光景は、ストレーザが決まって、彼の「不安」(58)や、故郷ウレットの「警告」(59)から逃れ、解放感を得られる場所でもあり、審美

的な効果だけでなく、彼の精神状態を探る手がかりとしての機能を合わせ持っている。

また、ノートルダム大聖堂に赴くストレザーは、その建築美だけでなく、そこに描かれたヴィオネ伯爵夫人 (Madame de Vionnet) の、「いつもより少し厚めのヴェール」、「深い葡萄酒色が黒地のそこここに微かに透けて見えるドレスの淑やかな落ち着き」、「小さめにまとめた髪型の魅力的な慎ましさ」、「グレーの手袋の物静かな印象」(175) に心を打たれる。大聖堂におけるヴィオネ伯爵夫人は、悩みを抱える弱さや敬虔さといった陰の部分が強調され、社交界における華やかさは対照的な造形や色彩が、ストレザーを魅了している。

このようにノートルダム大聖堂は、使者の責務に重圧を感じるストレザーを、パリの側により強く引き入れるものであり、そこではヴィオネ伯爵夫人とチャドの関係が清らかなものであるはずだという理想を追求しやすい。また大聖堂の持つ歴史の重みは、「ヴィオネ伯爵夫人が受け継いだ遺産」(176) として、あたかも伯爵夫人自身の存在感を高めるものであるかのような感慨を彼にもたらず。ジェイズは、大聖堂を背景にしたヴィオネ伯爵夫人の慎ましい姿を描写することで、ストレザーの現実逃避的な夢を引き出す絵画世界を展開している。ノートルダム大聖堂は、ストレザーに使者としての本来の任務を忘れさせ、ヴィオネ伯爵夫人の味方をするべきだと錯覚させる魅力をたたえた絵画となっている。そして歴史と伝統の結晶としてストレザーの目に映るだけでなく、彼がその絵画世界に身を置くことで、過酷な現実からの避難所としても機能しているのである。

ストレザーにそうした錯覚をさせるのは、ノートルダム大聖堂の絵画世界だけではない。ヴィオネ伯爵夫人にとっては「みずほらしい古びた家」(238) や「貧しい住まい」(238) であっても、ストレザーには「ナポレオン時代の栄光」(145) や、「昔のパリ」(145) の面影が漂う審美的世界として認識される。また、その住人であるヴィオネ伯爵夫人は、「クレオパトラ」(160) のような女性であり、「ルネサンスの銀のコイン」(160) といった入手困難な骨董品と比較される。さらにそこに漂う「シャトーブリアンやスタール夫人、若き日のラマルティエヌ」(145) らが活躍した時代の雰囲気やストレザーを夢中にさせるが、それは彼が若いころ果たせなかった文学者への夢が、夫人の邸において実現したかのような錯覚を彼に抱かせてくれるからに他ならない。ストレザーは、邸を背景にした伯爵夫人という構図に彼の理想を見出しているのである。しかし、こうした絵画効果もたらず印象的な場面において、ストレザーの中に、現実とはかけ離れた理想を追い求めようとする姿がある点は見逃せない。

絵画世界に逃避したいというストレザーの願望がもっとも顕著な形で表れているのが、ランビネの風景画のモデルとなったパリ郊外の田園風景である。ストレ

ザーがかつてトレモント街で見つけ、入手しようか迷った挙句、資金不足で断念したランビネの小作品は、彼の記憶の中に特別な絵画として残っている。この画の原風景を求めてバリ郊外へ出かけたストレーザは、実際の風景に、記憶の中にある理想の絵画を重ねている。

The oblong gilt frame disposed its enclosing lines; the poplars and willows, the reeds and river—a river of which he didn't know, and didn't want to know, the name—fell into a composition, full of felicity, within them; the sky was silver and turquoise and varnish; the village on the left was white and the church on the right was grey; it was all there, in short—it was what he wanted: it was Tremont Street, it was France, it was Lambinet. (304)

ストレーザが適当な降車駅を選び、気の赴くままに飛び込んでゆくこの田園風景は、実際の風景でありながら、常に「長方形の金色の額縁」で囲まれている。従ってそれは明らかに、現実のものというより、彼が若い頃に実現できなかった夢へと回帰させてくれる、理想の絵画である。そして「額縁は彼の望むままにいくらでも広がってくれた」(307)ように、ストレーザは彼の作り出す理想世界にどっぷりと浸り、現実を遠ざけようとしていると言える。

しかしながら、ストレーザがランビネの絵画世界に逃避することで得心の安定は、そこにボートに乗った男女が川をゆったりと下ってくるという偶然の出来事で、危ういものに転じる。微笑ましい男女の舟遊びの様子は、ランビネの風景をさらにストレーザの理想に近づける仕上げの一筆であると同時に、その男女がチャドとヴィオネ伯爵夫人であり、二人が決して「清らかな関係」ではなく、不倫関係であったことを彼に突きつける厳しい現実でもある。しかも、ヴィオネ伯爵夫人は見え透いた嘘でその場を取り繕おうとし、ストレーザの前に低俗な茶番劇を繰り広げるなど、現実の生々しさも伴う。

批評家タンブリング (Jeremy Tambling) は、このクライマックスを、「理想が真実にとってかわったのではなく、別の絵画へかわった」(39)とし、二人の関係が暴露した現実へのストレーザの対処さえも、最初の絵画世界の延長にあると捉えている。実際、ストレーザの現実逃避の姿勢はその後も変化していない。というのも、ストレーザはチャドと伯爵夫人が演じる嘘で塗り固められたその場しのぎの茶番劇につきあうことで、彼らの嘘を受け入れようとしているからである。ここに至っても、彼はヴィオネ伯爵夫人の嘘を責めようとしないのである。しかも、ヴィオネ伯爵夫人からの面会の申し出に対しては、「せっかく彼女に会

うのなら、これまで彼女が一番引き立って見えた場所で会いたい」(316)と考え、「彼女が暮らしている場所が、いつ訪れても彼女の周囲に大きく高く明るく広がっている絵のような住居が好きだった」(317)と、ヴィオネ伯爵夫人を理想の世界の住人のままでいさせようとする。嘘が発覚した後も、ヴィオネ伯爵夫人の邸は、ストレザーにとって「気高い明るい絵」(318)であることに変わりはなく、そこで「彼は深い安堵の息をついた」(318)とされていることから、夫人の邸は、彼が現実逃避できる場所であっただけでなく、パリで手に入れた精神の拠り所となっていることを窺わせる。

このように、ストレザーがパリで見出した魅力的な絵画世界を何とかして維持しようとするのは、過酷な現実とは一線を画す、居心地の良い世界に留まっていたいという彼の願望のためである。そして、ヴィオネ伯爵夫人や彼女の邸宅が審美的世界として扱われているところからも、そこにストレザーが見出した精神性は、彼が時に束縛すら感じる禁欲主義の対極に位置すると言えるだろう。

もっとも、こうした絵画世界の魅力に抗えないストレザーの姿には、故郷の実業を忘れ、パリでの享樂的生活から抜け出そうとしないチャドの様子に通じるものがある。しかしストレザーにとって絵画世界がいかにも魅力的に見えようとも、それはあくまでも理想郷に過ぎず、そこに留まり続けることはできない。それ故ストレザーもまた、最終的には彼の住む現実に戻らざるを得ない。ストレザーが最終的にはパリの誘惑を退ける結末には、完全に快楽主義に身をおくことに対するジェイムズの警戒と、快楽主義を押しとどめるためには禁欲主義のような歯止めも必要だという考えが、表れているのではないだろうか。

結び

ジェイムズの前期作品では、自己犠牲や自制心など禁欲的な行為にアメリカの存在感を認め、ヨーロッパの伝統主義が持つ歴史的、文化的優位性や、そこからくる腐敗性に対抗するメッセージを伝えようとする傾向が明らかである。しかし後期作品では、ピューリタニズムの禁欲主義が実を結んだ経済発展が、すでにアメリカ社会に定着していることが窺える。そして、そうした経済的恩恵を背景に、ヨーロッパの伝統に対してことさらアメリカの存在感を主張する必要はなく、むしろ、ヨーロッパの歴史や文化が生み出した芸術的要素や、それを享受する快楽に身を委ねようとする余裕さえ窺える。『使者たち』において、禁欲主義を体現するストレザーが潜在的に持っている奔放さも、そのようなジェイムズの意図を反映しているように見える。

ストレザーやニューサム夫人には理解しがたいチャドの欲望と、それを追及する彼の強かさ、そして広告業界に未来を見出す生き方は、それまでのアメリカが

依拠してきた禁欲主義や勤勉性とは対照的な、人間が本来持っている、生々しい生への欲求を示している。ジェイムズが「繰り糸」と称するゴストリーの役割は、この新しい生への可能性に満ちたバリにストレーザを誘うだけではない。彼女との関係を通して、ストレーザの二重意識を鮮明化するという、より重要な役割を持っているのである。

その二重意識の一方をなす本能的な欲求は、ピューリタニズムの禁欲主義に従うならば明るみに出すことが躊躇されるものであるが、ジェイムズは、背景を絵画のように描くことでその欲求を巧妙に作品の中に溶け込ませている。同時に、絵画があくまで絵画であり、現実とは異なるように、本能的な欲求が人間の真の姿を表しているように見えても、それを追求するのは理想の中だけであるという限界を表してもいる。

ストレーザは、チャドが享受する新しい世界の快楽的要素に強く惹かれながらも、根本的には禁欲主義の引留めが強く残る旧来型の人物であり、新時代に対応しきれない苦悩を背負われている。ジェイムズがそのような旧来型の人物を主人公としたのは、彼自身が本質的に禁欲的で、人間的な感情や欲求をある程度肯定しながらも、その欲望の行き過ぎに対して警戒し、情熱に流される人間よりも、冷静に判断する人間を通して、より充実した生のあり方を探ろうとしたからに違いない。

しかし『使者たち』では、禁欲主義に依存するかのように見えるストレーザにも、実は奔放さへの衝動があることが明らかである。そして、奔放さに惹かれてしまう気持ちと、そこに浸りきってしまうことを恐れ、禁欲主義に立ち返ることで自身の本来の姿を維持しようとするストレーザの気持ちの揺れは、必ずしも否定的に描かれてはいない。また、ストレーザがグロリアーニの庭園で若者ビラム(Bilham)に語る「力の限り生きよ」(132)というメッセージには、生への欲求が強く肯定されており、彼のバリでの冒険が後押しされている。

バリでの新たな経験のもと、ストレーザが、禁欲主義に依存するウレットの共同体を時には批判的に見つめ直しているように、ジェイムズ自身もアメリカの繁栄に自信を得た後期作品のこの時期に至って、アメリカの美德とされてきた生き方を見直そうとしているように見える。ジェイムズは時代の流れを読めなくなることに危機意識を抱き、情熱や欲望に惹かれる姿にも人間らしい姿があることを認めつつ、アメリカの建国精神を支えるピューリタニズム的な禁欲主義を批判するだけの心の余裕をも獲得したということではないだろうか。そして、ただ禁欲的なだけでなく、柔軟な対応が出来るストレーザの矛盾する二重意識を通して、生への欲求をより深く検証し直そうとしたのであろう。

Works Cited

- Bell, Millicent. *Meaning in Henry James*. Harvard: Oxford UP, 1991.
- Bradbury, Nicola. *Henry James: The Later Novels*. Oxford: Clarendon, 1979.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2008.
- Gargano, James W. *Critical Essays on Henry James: The Late Novels*. Boston: G. K. Hall, 1987.
- Holland, Laurence B. *The Expense of Vision: Essays on the Craft of Henry James*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1982.
- James, Henry. *The Ambassadors*. Ed. S.P. Rosenbaum. New York: Norton, 1994.
- _____. "The Art of Fiction." *Essays on Literature, American Writers, English Writers*. New York: Library of America, 1984. Vol. 1 of *Literary Criticism*. 44-65.
- _____. *The Painter's Eye*. Ed. John. L. Sweeney. London: Rupert Hart-Davis, 1956.
- _____. Preface. *The Ambassadors*. Norton, 1994. 1-15.
- Krook, Dorothea. *Henry James's The Ambassadors: A Critical Study*. New York: AMS P, 1996.
- Peiffer, Siobhan. "Commerce and Freedom in *The Ambassadors*." *Henry James Review* 23 (2002): 95-104.
- Sears, Sallie. *The Negative Imagination: Form and Perspective in the Novels of Henry James*. Ithaca: Cornell UP, 1968.
- Tambling, Jeremy. "'The Interest behind the Interest': *The Last of the Valerii* and *The Ambassadors*." *Critical Issues: Henry James*. New York. St. Martin's, 2000. 21-47.
- 横山 良「爆発的工業化と激動の世紀末」『アメリカ史』山川出版社 2004. 209-42.

What Strether's Passion for Freedom Means in *The Ambassadors*

Tomomi Ushirokawa

In the final scene of *The Ambassadors*, Lambert Strether chooses against accepting higher social status and a stable life, even though both would benefit him. A number of critics have noted a relationship between Strether's unselfish behavior and the New England consciousness. However, that consciousness reflects only a part of his state of mind. He is a middle-aged man who awakens in himself a passion for freedom and pleasure as a result of the Parisian experience he has after spending many fruitless years in Woollett, a small city in Massachusetts. This paper analyzes Strether's conflicted state of mind—his New England consciousness versus his passion for freedom, considers the influence of changing social situations in America, and explores James's use of certain narrative devices and picturesque descriptions.

Upon leaving for Paris, Strether's mission is to rescue Chad—the son of Mrs. Newsome, a wealthy widow of Woollett—from the clutches of his Parisian lover so that Chad can take over his family's manufacturing business. In this way, Strether is expected to contribute to furthering the prosperity of the Newsomes' family business, and, after completing his appointed task, to marry Mrs. Newsome. The success of the Newsomes' family business is based on their belief in the conventional notion that value results from Puritanical diligence. Chad's sense of value—based on his pursuit of pleasure and interest in visual art—seems contrary to his family's belief in diligence; however, it is still likely to further the success of the advertising department of his family's manufacturing business. Strether's passion for freedom is also associated with Chad's sense of value, especially when he keeps the company of Maria Gostrey.

James treats Gostrey as a confidante for Strether rather than a dominant character. She becomes the reader's friend because she conveniently reveals to him or her the history of Strether's life through her conversations with him. In earlier work by James, the narrative flow was sometimes interrupted by lengthy explanations made by an omniscient narrator, but by the time he wrote his major later novels, James had improved his use of confidantes. Furthermore, in *The Ambassadors*, Gostrey contributes to leading Strether to new experiences and sets him free from the constraints of the New England

consciousness.

James elaborately depicts Parisian beauty, including the solemn sights of the Notre Dame Cathedral, the romantic air of Madame de Vionnet's residence, and Gloriani's glamorous garden. The pictorial world symbolically reflects Strether's passion for freedom in his sentimental journey to Paris. He is caught up in finding ideal situations there, because, by doing so, he can forget the burden of his duty. He cannot resist the attractiveness of the pictorial world, because it gives him passing pleasure and a feeling of nostalgia. However, the pictorial world differs from reality, which means he cannot stay there forever. Strether's decision in the final scene signals his acceptance of reality. James thinks that Strether needs to return to his New England consciousness. His excessive abandonment of himself to the pleasure of the pictorial world is thus critically noted.

The Ambassadors was written during a period in which American wealth had been firmly established and the advertising business had begun to rise rapidly. James must have no longer felt a need to declare America's economic advantage and argue for the importance of diligence against European sophistication. Strether's passion for freedom seems to relate to James's acceptance of a new concept of value. In his depiction of Strether's passion for freedom, James alerts readers to an attitude that refuses to keep up with the changes of the times.

Ube National College of Technology